



講演会の趣旨

1980年代半ば以降、大規模な外資流入を梃子として急速な発展を遂げてきた東南アジア地域の経済に対する一般的な視点は、近年、主として都市部や輸出加工区における第2次産業（製造業）の拠点形成とそれらをつなぐサプライチェーンの構築、並びに流通・金融部門を始めとする第3次産業の発展に焦点を当てるものとなっている。一方で、相対的にGDPへの貢献の比重が落ちてきているとはいえ、農業・水産業を始めとする第1次産業部門も、現地の、特に地方部の経済・社会の重要な柱であり続けている。これまで、東南アジア地域の第2・3次産業部門については経済学的・経営学的視点から、第1次産業部門については文化人類学的・社会学的視点から別個に論じられることがほとんどであったが、今回の講演会は、それぞれの産業部門で経済・社会をつくり支えている小規模生産者（農民・漁民・中小零細企業）の生態・行動に着眼し、統一的に東南アジアの経済社会を議論する視座を探ることを趣旨として、シンポジウム形式で実施する。

講演1
林田 秀樹

インドネシア・カリマンタンの野に 生きる：小農たちの栽培作目の選択

大陸以外の島で世界第3位の面積を誇るカリマンタン島、別名ボルネオ島は、インドネシア、マレーシア、ブルネイの3国が国土を領有している島である。島名としては後者の方がポピュラーだが、インドネシア側の正式名称は前者で行政区画として5つの州が設置されている。今回取上げる西カリマンタン州は、インドネシアで2番目に広い面積をもつ州であり、世界で最も多くつくられている植物油・パーム油の原料生産基盤であるアブラヤシ農園の面積でも同国で2位である。この州で、小規模な農民（小農）たちは、かなりの程度アブラヤシ栽培に依存して暮らしてきているのであるが、当地の農業がアブラヤシー色に塗り潰されているのかといえば、必ずしもそうではない。また、アブラヤシが儲かる作物だからといって、そればかりに頼るのは決して好ましいことではない。

今回の講演では、当地の小農たちの間で、どれほどアブラヤシ栽培が支配的な位置を占めているのか、それ以外の作目を選ぶとするのはどのような人たちが、アブラヤシー色に塗り潰されない農業にはどのような意味があるのか、などについて考えたい。地球上でも希少性の高い生態系をもつといわれるカリマンタン／ボルネオの地、そこでアブラヤシ栽培が大規模化され生態系が損なわれてきた要因を探ることは、アブラヤシ農園拡大の主体の1つである小農たちに責めを負わせることと同義ではない。大切なのは、彼らの作目選択の実態を調べ将来の可能性について熟考することだ。

講演2
赤嶺 淳

太平洋のフロンティア世界を 生きる：サンゴ礁のマルチな漁法

東南アジアの地図をながめてみてください。東南アジアが両隣を中国とインドという大文明のあいだにはさまれていることがわかります。同時に小ささまざまな島が点在していることにも気づくでしょう。こうした海は、泥の海（干潟）と澄んだサンゴ礁の海のふたつに分類することができます。とくにインドネシアのバリ島から東にむかって点在する小さな島じま―この海域は世界にもまれな多島海でもあります―は、全球的に貴重な大サンゴ礁群となっており、世界のスキューバ・ダイバーを魅了してやみません。この海域に豊かなサンゴが育つのは、こうした多島海が、これまで一度も陸続きになったことがないほどに水深が深く、透明度が高いからです。

当然ながら、干潟とサンゴ礁の海では、住んでいる生物も異なり、漁法も、漁獲物の流通先も異なってきます。たとえば、東南アジアの海の民は、中国で賞味される乾燥ナマコやフカヒレなどの食材、真珠貝や鼈甲といった装飾品も生産してきました。これらはサンゴ礁の海の産物です。本講演では、こうした小さなサンゴ礁島に住むバジャウ人を事例として、およそ300年にわたって中国へ輸出されてきた乾燥ナマコを中心に、1) 「フロンティア世界」という概念を援用しながら、人びとがいかにサンゴ礁という環境を利用してきたのか、2) 昨今の国際的な環境保全運動の高まりによって、こうした人びとの生活が変化しつつある「いま」を報告し、3) サンゴ礁保全とサンゴ礁の民の生活の関係性を考えます。

講演3
中井 教雄

デジタルで 生きる街の民：タイのeコマースのいま

eコマース（EC）とは、インターネットなどのネットワークを介して契約や決済などを行う取引形態のことです。インターネットでモノを売買する電子商取引の総称を指す。ECは、B to B（企業間取引）、B to C（企業と消費者間の取引）およびC to C（消費者間取引）の3つに大別される。

ところで、ECを含めすべての流通は、いかなる国においても、商流・物流・金流・情報流の4つに区分される。近年、情報技術の急速な進化に伴い、これら4つの流通システムが相互に向上している。これにより、従来ではほとんど大企業のみが活用することのできた電子商取引の仕組みが、小規模生産者（中小零細企業）にも利用可能となりつつある。

この点について、ASEAN域内を概観すれば、シンガポールのように金流あるいは情報流を中心にECが発展した国もあれば、タイのように商流あるいは物流を中心にECが発展した国も存在している。

今回の講演では、東南アジアの中で、中小企業金融における第1次産業から第3次産業のバランスが良いタイに焦点を当て、街（都市部）を中心とする流通ネットワークにおいて、小規模生産者がデジタル技術を活用することでどのような事業展開をしているのかについて、いくつかの事例を提示しながら考察する。また、コロナ禍に一見分断されたかに思われた流通が、実際にはECの発展を通じて、アフターコロナではより強固なものへと深化した点についても紹介したい。